

平成 28 年度 第 3 回大阪府立泉北高等学校学校協議会

1 日時：平成 29 年 1 月 27 日（金）15：45～17：00

2 会場：本校会議室

3 出席者 <委員>

中村 俊一氏（立志館ゼミナール館長）、池内 博一氏（大阪電気通信大学 専任講師）、
深井 和美（泉北高校 PTA 会長）、森崎 幸子氏（泉北高校後援会 会長）

4 挨拶 校長

- ・ 本日は学校教育自己診断結果に基づいて、本校の学校経営の評価及び平成 29 年度学校経営計画に対するご意見とご助言をいただきたい。
- ・ SSH 再受託に取り組んでおり、状況を説明する。

5 事務局からの報告

①今年度の学校経営計画の目標達成状況及び来年度学校経営計画（校長より）

- ・ 進路指導を文部科学省が推奨する内容に合うようなものにするために、長期留学を推奨する取り組みを行った。トビタテ留学 JAPAN への申請を軸に指導を行っており、今年度は 6 名申請を行う予定である。
- ・ 大学の入試制度の変更により、長期留学や課題研究の取り組みを評価する入試を活用して SGU 等の大学への進学が増加している。例えば、SGH 事業の一環でアメリカ領事館において英語でのディスカッション経験やボランティア活動をアピールして関西大学の A0 入試に合格することができた。
- ・ 国公立の受験者数は昨年と横ばいとなっているが、3 年前と比較するとセンター試験の平均点は上がっている。
- ・ 進路指導部とは別に G キャリア課を新設し、9 名の教員で生徒全員の入学時から学習内容や参加した様々な活動などをまとめてポートフォリオ化して進路指導に役立てることができるようなシステムを作ろうとしている。
- ・ スーパーイングリッシュティーチャーによる TOEFL iBT の目標達成に向けて努力している。
- ・ 地域の取り組みに積極的に参加させる計画を立てている。
- ・ ホームページを刷新し、教員が行っている授業の様子や工夫を共有できるような仕組みを盛り込むことを計画している。
- ・ 部活動への入部率 8 割は少し割りこんでいる状況である。遅刻は 2000 以下をめざしており、達成ができるかはわからないが、昨年と比較して非常に減少している。
- ・ 「置き勉」対策を学年中心に取り組んだが、取り組みが浸透させるにはもう少し時間がかかる見込み。
- ・ ワークライフバランスを鑑みた取り組みとして、ノークラブデーや一斉退庁の取り組みも始める予定である。

- ・来年度の学校経営計画は、今年度のを引き続き取り組んでいく予定である。

②学校自己診断アンケート（生徒・保護者・教職員）結果について（校長より）

- ・充実感は3者とも大変高い。
- ・自学自習の時間への確保に教員のほとんどが取り組んでいると回答しているが、生徒も保護者も5割程度が取り組んでいると回答しており、大きな差が見られることがわかった。
- ・進路指導において、教員は力を入れていると回答しているが、保護者には十分伝わっていない状況が見られる。
- ・部活動両立にも8割の教員が肯定的な回答をしている一方で、生徒や保護者は5割程度と大きな差が見られた。
- ・防災意識について、学校としては意識を高くもっていると回答しているが、生徒と保護者にはそれが伝わっていない状況にある。これまでの防災訓練などを振り返り、周知徹底できるような工夫をしていく必要があると考えている。

③第2回授業アンケート結果について（教頭より）

- ・全体的にポイントが上昇している。しかし、今後、アクティブラーニングを取り入れた授業で、生徒たちが自発的に学習に取り組むことに重点を置くよりよい授業を提供できるようになる必要がある。このため、来年度は校内での研究授業に重点をおいて、さらなる授業力向上をめざす。
- ・生徒たちにアクティブラーニングの目的が浸透していない状況も見られるため、その意義について説明できるようにする必要もあると考えられる。

④SSHの再申請の取り組みについて（校長より）

- ・3月下旬に結果がわかるが、再指定を受諾できなくても経過措置により、来年度の事業の継続を行う。
- ・再申請には3倍の確率で、競争率が高い状況にある。
- ・課題研究の質的充実及び科学的エリート教育についてヒアリングで質問があった。
- ・高大連携に関して、本校のSSHを経験した卒業生の活用を新たに加えている。
- ・理数以外での授業でも課題研究的なアプローチをどのように取り入れるかについて、あるいはその取り組み状況についてヒアリングで質問があった。
- ・実直で、安定性があるこれまでの高い評価に、どれくらい卓越性を加えることができるかということが求められていることがヒアリングでわかった。
- ・研究探求メソッドを高大連携を通じて確立できることが卓越性につながる取り組みと捉えている。

⑤SGH事業報告（SGH研究主担）

- ・企業との連携について、どのように広げていくべきか憂慮していたが、グローバル課題研究で2年生全員がそれぞれのテーマに沿って課題研究を深めていく過程で、自然発生的にそれぞれのテーマに基づいた企業やNPOなどと連携していくようになった。

6 協議

- ・アンケートについて

（委員）家庭自習を上げていく必要があるのは大学でも重視しているが、大学でも自習しない学生が増えている傾向がある。しかし、高校生は授業の準備はしていると答えている。ただ、学習

だけに特化した項目、例えば学習時間など、を具体的に入れたものを加えてはどうだろうか。保護者にも家庭学習をどれくらいやっているかを聞いた方が良いのではないか。

→ (学校) ベネッセのスタディーサポートでは学習時間を聞いて確認はできている。全国的にも入学後下がる傾向があるが、それがどれくらい盛り返すことができるかが重要になってくる。

(委員) 保護者が見る勉強時間と生徒が実際している勉強時間に差があるかもしれない。

→ (委員) 定期考査や入試前には勉強しているが、それ以外は家庭で勉強する姿はあまりない。

・自学自習について

(学校) 自学自習時間に塾の時間は含めているのか、いないのか。

→ (委員) やる気が出せるかどうかの問題であり、動機が必要であるが、入試や教員の指導といった外発的動機づけであると短期間で終わってしまうため、内発的動機付けが重要だ。生徒の達成目標と実際にできることに開きが大きすぎて達成できずにやる気がなくなる傾向があり、スモールステップを設定させる必要がある。

・SSHの再申請について

(委員) SSHやSGHなど目的意識がはっきりした学校であって、すべてが前向きで自信をもって進んで良いと思う。課題研究の取り組みは、社会に出たときに大変役に立つと思われる。卓越性はしっかり今の事業を進めていくことで自然につくのではないかと思う。

(委員) 進路の面接で、グループで意見が違う際の対応について聞かれ、SSHの取り組みを通じてどのように対応したら良いか身についていると生徒が答えることができた。このことはすばらしいと思った。面接に対しても緊張感なく話せたことは、SSHでの課題研究の取り組みの成果でもあると思う。

・留学について

(委員) 若い頃に海外で学ぶ経験があった方がよいと思う。英語ができなかったとしても、むしろ苦手な学生が海外に行ける環境を作っていただければと思う。

・グローバルで活躍できる人材に必要な能力について

(学校) 海外でも活躍できる人材になるために、何か学校教育を通じてつけてやれる能力はあるか。

→ (委員) 日本人の教育レベルや環境は質が高い。日本人はマイナス思考が強いが、アジアの中では非常に能力が高いと思うので、長所を伸ばしていけばよいのではないか。卓越性も長所を伸ばせば出るのではないか。長所が伸びた生徒が周りの生徒の能力も伸ばすことができるのではないか。